令和６年度第２回播磨科学公園都市の新たなあり方検討協議会
議事概要

１　日　時　　令和７年３月27日（木曜日）14:30～16:30
２　場　所　　たつの市役所 多目的ホール
３　報　告
　第１回協議会以降の動きについて
　　資料に基づき説明
４　議　事
　（１）課題と論点の整理
　　資料に基づき説明
　（２）今後の進め方について
　　資料に基づき説明
　（３）発表　①播磨科学公園都市圏域定住自立圏の取組について：たつの市
　　②地域住民の主体的参画について（事例紹介）　　：委員

【紹介事例】

＜鳥取県八頭郡智頭町　日本1/0村おこし運動＞
地域の方が自分たちにできることを小さなところからやっていく、無（ゼロ）から有（イチ）への一歩を踏み出そうという運動。小さな活動から進めていくこと、それらを主体的に取り組むキーマンの存在がポイント。

＜千葉県八千代市　緑が丘西自治会＞
放置されていた空き地を、地域住民の方が活動の場として活用。まちの活性化に繋がる団体も立ち上がっている。自分事としてしっかり活動できる人を作り上げること、それらの方が活動しやすい仕組づくりが重要。

＜大阪府八尾市　校区まちづくり協議会＞
地域や協議会が「わがまち推進計画」をまとめ、地域が主体となってまちづくりを進めており、計画に基づき市が経済的支援をしている。計画活動に対する予算取りまでを自分たちでしている。

＜兵庫県三田市　協働事業提案制度「ええやん！やってみよっ！」＞
市民が自分たちでやってみたいことに、市が経済的支援をするというもので、他の団体などとの連携・協働を図るというもの。

（事例を踏まえた発表委員によるまとめ）

・地域のことを自分事として認識していただいて、自らが動くことで地域が変わっていくことを実感していただくことが重要であり、自身の楽しみに繋げていく仕組も重要である。そうやって活動していく中で、地域の課題の掘り起こしができる。そういった方々が活動することにより、同じような立場の方の参画のハードルを下げて、自分たちが動くということの意味を感じていただきたい。行政としてはそれらを後押しする制度作りが必要である。
・播磨科学公園都市は、県によって作り上げられたまちという認識を払拭する必要がある。地

域の方とは危機感を共有し、自分たちが主体になるのだと認識していただけるよう促していきたい。

（４）意見交換

【委員意見】

（たつの市長）

・私からは兵庫県立粒子線医療センターについて発言させていただく。県立病院の厳しい経営状況については十分把握しているが、播磨科学公園都市の今後について真剣に議論をし始めたタイミングで、医療・福祉の核となる粒子線医療センターの早期撤退という意見が検討委員会で出たことは誠に遺憾である。結論はどうなるか分からないが、地元の意見や本協議会での今後の議論、SPring-8との相乗効果も考慮し存続について検討いただきたい。

（上郡町長）

・これまで2回にわたり協議会を実施し、播磨科学公園都市の新たな方向性を検討した中で、兵庫県の考え方として、新たな価値をつけて播磨科学公園都市を拡張させようとしているのか、または社会情勢に合わせてダウンサイジングしようとしているのか、どちらの方向性にするのかは明確になっていない。県の方で方向性を明確にしていただければ、議論が進めやすくなるのではないかと思う。

（佐用町長）

・40～50年前に設定された播磨科学公園都市のコンセプトは、以降のインターネットの普及等の社会情勢の変化により、大きく変わってしまった。当初は研究者や住民が集まる人口3万人都市として想定されていたが、現状は夜間人口が1,500人を切る都市となっている。まちびらきから20年以上が経ち、住民の高齢化と、この地域で育った子供の地域外への流出による過疎化が進行し、世帯構成が変化している。また、産・官・学の連携の中で、研究者が研究とプライベートの両面でまちを発展させていくという考え方は実現できていない。

・播磨科学公園都市内の施設が老朽化しつつある中で、世界一を目指すSPring-8がリニューアルするように、他の施設についても新たに作り変えながら、まちの新陳代謝が必要である。兵庫県立粒子線医療センターも老朽化が進んでいるが、SPring-8と同様にリニューアルについて、県全体の医療のあり方を見て検討することになるかと思う。

・土地の活用方法について、第1工区の整備は完了しているが、第2工区、第3工区の整備は進度調整中であり、開発の方向性が明確化していない中で、今の播磨科学公園都市をどうしていくのかが曖昧になっている。私としては、播磨科学公園都市は西播磨地域の中心に位置し、また西播磨県民局が立地していることから、これらのインフラを活用しながら西播磨の核となるまちを目指すべきではないかと思っている。

（委員）

・今までのやり方では播磨科学公園都市の今後の展望が開けないため、本協議会が設立されたと認識している。地域の考え方と方向性を議論することは大切だが、これは県だけで考えていくものではない。今までは県がデベロッパーとしてまちづくりを進めてきたが、これからのまちのあり方を考えていくのであれば、たつの市、上郡町、佐用町の3市町のビジョンや

市民の考えも取り入れて、考え方のフレームワークを変える必要がある。そのためには、県と市町がフラットな立場で新しいまちについて検討する必要がある。

・「播磨高原東小学校及び播磨高原東中学校の在り方検討会」で実施された住民アンケートで「小中学校がなければ今後住み続けられない」という意見もあるように、住民にとっては小中学校の存廃が今後もこの地域に住み続けられるかどうかの大きな分岐点のひとつとなっている。小中学校を存続する場合と廃止する場合では、まちづくりのシナリオが大きく変わることから、本協議会においても小中学校のあり方の検討が大きな議題となる。

・SPring-8は播磨科学公園都市のシンボルであるが、この地域にとってどのような意味を持つのか明確になっていない。SPring-8をまちづくりに活かせていないことが、現在の状況に繋がっているのではないか。SPring-8と地域がどのように共存してSPring-8が地域に何をもたらすのかを、本協議会で整理・検討していく必要がある。

・まちびらき30周年をひとつのゴールとして、本協議会で前向きに楽しい議論ができればと思う。

（委員）

・播磨科学公園都市は、たつの市、上郡町、佐用町の3市町と県が関係する地域であることから、地元自治体がこの課題に向き合うことが重要である。そのため、本協議会には3市町の市町長と副知事が参加されており、また本協議会が地元自治体であるたつの市役所で開催されていることは良いと思う。

・本協議会では、まちびらき30周年に向けたビジョンと持続可能な都市経営に向けた基本方針をまとめていく必要があるが、これらをまとめるプロセスで地元自治体や住民が主体的に参画することが重要である。

・地域の方向性を決めるのは行政ではなく、住民であるべきである。そのために、播磨科学公園都市の現状について厳しい面も含めて情報提供することで地元住民に向き合ってもらい、住民の参画を求めていくことが重要である。このとき、できるだけサイレントマジョリティの住民の意見を反映するよう工夫することが重要である。また、住民の参画だけで全てが解決するわけではないため、地元自治体の参画も重要となる。

・播磨科学公園都市圏域定住自立圏構想における「目指すべき将来像」の「各市町の主体性を尊重しつつ、圏域思考に基づく相互連携を一層強化し、持続可能な圏域形成を進めます。」という考え方は、本協議会でも非常に参考になる。第２期共生ビジョンにおける播磨科学公園都市の位置付けが気になるため、機会があれば追加で紹介をお願いしたい。また、今後策定される第３期共生ビジョンでは、本協議会の議論を踏まえて、播磨科学公園都市を中核としたビジョンの策定をお願いしたい。第３期共生ビジョンの策定においては、県が実施する産業用地・住宅用地の分譲促進の施策を基に、市町が播磨科学公園都市の持続可能性のためにどのような施策が展開できるのか検討することが重要になる。

・今後の播磨科学公園都市のあり方については、財政的なフレームワークから設定した施策展開だけでなく、大胆な都市の活性化を描けるような施策展開も考えるべきではないか。

（委員）

・佐用町長の発言にもあったとおり、持続的なまちとするためには「新陳代謝」が重要となる。北海道千歳市や広島県廿日市市のように過去の開発計画が良い方向に転じ、長年使用されていなかった産業用地が開発されて地域が活性化した事例もあるが、このような事例は少ないため、次世代に向けた中長期の計画を立てて、新陳代謝を促していくことが重要となる。

・政府によるテクノポリス計画の終了後も、サイエンスパーク、リサーチパーク、テクノパーク等の研究開発を核とした都市づくりは国内外で絶えず行われている。これらのサイエンスパーク、リサーチパーク、テクノパークの現状の評価、運営のあり方を参考にするとともに、播磨科学公園都市と比較検討することで、播磨科学公園都市が他と競合する部分や播磨科学公園都市が持つ強み、播磨科学公園都市が目指す方向性を整理し、独自の未来とアイデアを描く必要がある。

・イノベーションの方向性として、播磨科学公園都市を大きく変えるようなトリガーとなる事業、例えばSPring-8に続く、学術研究などのプロジェクトを持ってくることができるかどうかがひとつの考え方としてある。縮小していく中でも、5～10年ごとに、その時代に必要な新たな施設や設備を導入していくことが持続可能なまちづくりには必要である。現状維持の発想では限界がある。まちをダウンサイジングしていく場合であっても、まちをアップデートしていくことは計画を立案する上で重要である。

・イノベーションチームは、外国人や他地域の人を含めた、素晴らしいアイデアを持った様々な若者を呼び込める場にできれば良い。現状は、SPring-8での研究から生まれたアイデアがこの地域に還元されていない。SPring-8の成果物がこの地域で新産業に繋がり、この地域で起業する等により地域内で仕事が創出されるような仕組みが構築できれば良い。地域内に仕事がなければ、地域の定住自立はできない。このため、他地域を参考に、この地域の魅力は何か、またSPring-8をどれだけ活かせるかを、できるだけ多くの企業関係者やステークホルダーで集まって検討し、イノベーションを起こせるようにしていきたい。

（委員）

・SPring-8は、農業分野におけるコメの品種改良への活用など、これまで活用してこなかった土木や芸術、観光分野にも活用を拡大しており、今後も新たな分野で積極的に活用していきたい。

・SPring-8は研究者や大企業の利用が多いが、3市町や地域住民にもぜひ活用していただきたい。また、SPring-8を核としたまちおこしにも活用できる可能性がある。各地で各種活用事例が展開されている。これら活用事例を聞けば利用しやすくなると思うので、声をかけてもらえれば説明に伺う。

（委員[事務局による代読]）

・都市フレームチームの役割は、播磨科学公園都市の将来シナリオを示すことである。将来シナリオの検討の際は、将来の推計値が事実・情報として非常に重要となる。したがって、将来シナリオの検討に必要な「Evidence based」には、過去・現在・未来のエビデンスの全てが入っているべきである。

・イノベーションチームは令和9年度以降も存続するチームであり、その果たす役割は非常に大きい。先導的な政策やプロジェクトについては、国、県、市町、民間企業、大学やSPring-8と一緒になって検討しなければならない。また、都市に投資や人材を呼び込むために努力しなければならない。スモールスタートでもいいので、新しく面白い戦略を出していくべきである。

・検討体制の「地元関係者等の参画（住民、企業、学生等）」には、「周辺領域」として母都市姫路市など広域な範囲で参画してもらうべきである。「周辺領域」をどう活かすかは、今後のまちづくりのポイントとなることから、地理的、分野的、主体的な周辺領域を活用すべきである。

（委員）

・今後の進め方に示されている検討体制に問題はないと思う。この体制の実現に向けて、情報の非対称性をなくすため、特設ホームページを作成する等により情報を発信した上で、興味を持って情報を受け取っている人の意見を把握できる環境づくりが重要である。

・今後、作業部会を進めるに当たっては、マネジメント会議が重要となる。マネジメント会議では、個々のチームで検討したことをまとめて、コンセプトや草案、今後の方向性等を決めることになることから、構成メンバーや市町職員が腹を割って話すべきである。

（委員）

・住民が参画する会議では、議論のファシリテーターが意見を吸い上げ、さばけるかが重要であり、力量が問われる。また、不都合な情報も含めて全て情報共有した上で、住民の参画により意見をいただくことが重要である。

・SPring-8を地域で使用できるのであれば、できるだけ使用して地域内で経済を循環させるような仕組みを作ることが重要である。

（委員）

・進行中のプロジェクトは「見える化」していくべきである。プロジェクトが複数進行していることが分かるようになれば、地域の活性化に繋がると思う。

・まちびらき30周年イベントや記念事業を実施する場合は、事前にも様々なプログラムを実施することも想定されることから、1年くらい前から住民の皆様や地元企業と一緒にイベントの実行委員会などを立ち上げていく必要がある。

（委員）

・今回の協議会では県が司会を務めているが、次回からの協議会では県と市町がローテーションで司会を担当していくのが良いのではないか。